二〇一三年一月五日

中天に朝月白き寒の入り　菜々
山稜に広がりゆける初明かり　よし子
小港に立つ初糶の太き声　よし女
機織女御用始の襷がけ　よう子
地響きのごと合唱す初読経　なつき
初日の出愛づ喜寿と汝と古希の吾　百合
沖遠く漁火残る冬の朝　わかば
明けの空われがちに翔つ初雀　宏虎

二〇一三年一月四日

相寄れば酒の品評家の春　ともえ
子等去にてもとの静けさ鏡餅　ぽんこ
じゃんけんで頒けるケーキや初笑ひ　なつき
臘梅のふふみそめたる空青し　せいじ
霜降りの浜辺となりし朝かな　わかば
笹鳴ける詣で帰りの裏参道　はく子
産土神の初松籟を聴きにけり　三刀
恙なく喜寿の一歩や夫の春　菜々

二〇一三年一月三日

お年玉浪人生にも隔てなく　なつき
休みなきビニールハウス初明かり　こすもす
御降りや玉砂利鳴らし拝殿へ　雅流
去ぬ吾子を見送る門に風花す　あさこ
またひとつ笑ひ皺増ゆ初鏡　満天

二〇一三年一月二日

ほのぼのと谷戸の甍へ初明り　菜々
注連縄の蝶ネクタイすポストかな　こすもす
初雪に白変したる野面かな　よし女
脱線す所化の法話に初笑ひ　満天
お目当ての福袋へと初電車　なつき
初夢の中でも何か探しもの　うつぎ

二〇一三年一月一日

初日いま松原を縫ふ舞子浜　わかば
切っ先の瑞々しさよ竹飾り　宏虎
寝たきりの人を囲みて初写真　治男
大橋と海峡染めて初日影　わかば

二〇一二年一二月三一日

今朝晴れて宝満山は雪化粧　さつき
労多き日を重ねたる日記果つ　なつき
厨から脱出できぬ大晦日　満天
小商ひ終へて笑顔の晦日蕎麦　ひかり

二〇一二年一二月三〇日

餅花や手品のごとき手際なる　こすもす
道路へも越境したる年の市　わかば
風花は天使の梯子かと思ふ　さつき
飛び跳ねて意気軒昂や歳暮海老　よし女
裸木を物干し竿となせりけり　あさこ
生き甲斐は家庭菜園去年今年　百合
煤逃げの夫に弁当持たせけり　なつき
路地越しに白息交はす気安さよ　あさこ
被災地の笹蒲鉾を歳暮とす　せいじ
餅を搗く杵音高き杣家かな　うつぎ
白壁に現れては消ゆる枯木影　さつき
年用意縫ふよりほどく針仕事　有香

毎日句会みのる選・二〇一三年一月七日